

第2章 道具の非道具的利用 —ことばやものが実際に使われている様子の研究—

0. 導入

以下では本論「体面確保と配慮の表示—施設内の日常会話の研究—」でことばという道具の非辞書的利用を研究し、補論「杖という道具の扱われ方」で杖という道具の非マニュアル的利用を研究する。いずれの場合も、それぞれ「道具」（ことばや杖）の実際の社会的状況の中での使われ方を研究するという点で社会学的研究であるということになる。上記のような観点から別々に書かれた本論と補論をここにひとつにまとめて発表することにした。どうか組み合わせて読んで欲しい。

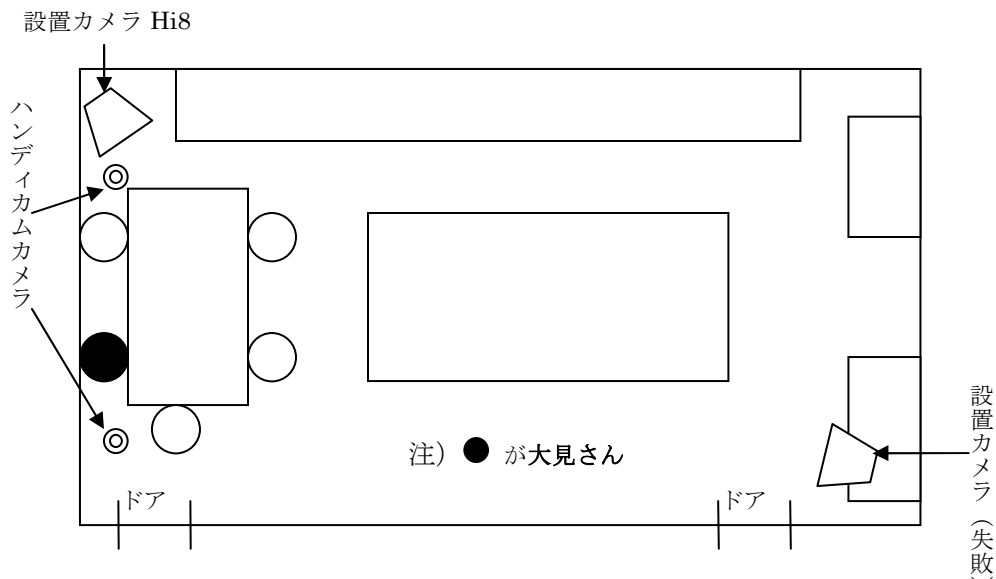
(樫田美雄)

体面確保と配慮の表示—施設内の日常会話の研究—

1. 調査概要

2004年7月29日と8月4日に、A県T市にある社会就労センターセルフZ園（ここでは施設名、人名などは全て仮名表記する）にご協力頂き、調査を行った。7月29日木曜日に調査対象者に日常生活や義肢装具等についてのインタビューを1時間ほど行い、MDによる音声録音をさせて頂いた。そして、8月4日水曜日午前8時から午後5時半過ぎまで、作業所や寮（2人部屋）等での具体的な相互行為のありよう及びその様子について調査を行った。この際、事前に許可を頂いて、撮影・MDによる音声録音をさせて頂いた。私と正島が担当をさせて頂いていた大見敏一さん（仮名）が作業をなさっている軽作業所の設置ビデオカメラは2台で、その他に学生が個々にハンディカムカメラを持って撮影させて頂いた。しかし、撮影後に設置ビデオカメラ1台の撮影に失敗したことに気づき、結果的に3台での撮影となった。軽作業所におけるビデオカメラ配置図については、図1を参照して頂きたい。

本稿は、道具や言葉がただ普遍的に使われるのではなく、マニュアルや辞書には書かれていない状況（文脈）に依存的な使われ方をされているという点に着目しようとするものである。文脈依存的な言葉や道具の使われ方は、ある文脈の人にとっては当たり前であり重要であるが、誰にでも共通するものではない。そうしたマニュアルに書かれていない使われ方にも重要な意味があるということを示していきたいと考える。ここで調査を行うことが必要となってくるが、調査をしたからといってすぐに気付くものでもない。この調査実習報告書では音声録音や撮影で得られたデータを、何度も詳細に見ていくなかで文脈依存的な道具や言葉の使われ方を提示していきたい。



【図 1：軽作業所のビデオカメラ配置図 2004年 8月 4日】

2. 大見敏一さんについて

私たちの班は、大見敏一さんに調査させて頂いた。大見さんは、現在 53 歳で調査対象者 4 名中唯一の後天的な障害者であり、くも膜下出血で左半身麻痺になるまでは板前をしていた。障害者等級は 2 級で左足に装具をつけ、杖を使っている。入所期間は 2004 年 4 月 1 日現在で 1 年 6 ヶ月と、4 名の中で 1 番日が浅い。Z 園に来る前は A 県 N 市の施設に入所していた。表装科を希望しているが、軽作業科で作業をしている。軽作業科では現在、月刊漫画雑誌の付録を作るところと、刺身などの飾りについては菊の花のようなプラスチックの葉を必要な部分といらぬ部分にちぎり分けるところが見られたが大見さんはプラスチックの葉をちぎる作業を行っていた。テレビ好きで、月刊テレビ番組情報雑誌を年間購読し、そこに記載されていない X 放送の番組欄を、毎日娯楽室に置かれている新聞で調べている。軽作業中、会話に参加することはあまりなかったが、会話の随所でテレビ好きであることを作業所の人（入所者、通所者、施設職員など）が知っているように思われた。

3. 注目部分

データを見ていて聞いて気付いたことは、大見さんの話している内容がそれまで言っていた内容と違いが見られるということである。これは、大見さんがくも膜下出血により、2 度の手術をうけていることが関係しているのではないかと考える。この時、他者訂正がされる時とされることなく会話が進んでいく時に分かれる。8 月 5 日のゼミにおいて、私は、他者訂正がされていない箇所であるテレビ番組の会話について、会話の参加者が「麦畑」が本当は「さとうきび畑」であることを知らないために他者訂正がされなかったと発言した。しかし、客観的なデータに基づくものではなかったため、「自己訂正は他者訂正に優先される」ことを述べたうえで、「“麦畑” が本当は “さとうきび畑” であることを知っている人がいた」可能性があることを指摘された。そこで会話の中で、自己訂正を促す箇所が見られることはなかったか、本当は知っている人がいたのかどうかを見ていきたい。会話の中で、自己訂正を促す箇所が見られることはなかったか、本当は知っている人がいたの

かどうかを見ていきたい。そして、他者訂正がされている箇所とされていない箇所とに注目し、日常会話がどのように形成されているのか考えてみたい。

2004年8月4日 大見さんの部屋

さとうきび畑① 7:55:17AM~7:55:44AM

01 学生：今日おもしろい番組何か。ありましたか

02 大見： ((月刊テレビジョンに目をやり、手に取る)) (1.8) さとうきびの。ある (わ) ((雑誌を開く))。

03 学生：あ：：：
(0.2)

04 大見：9時〔PM〕から ((眼鏡を外す)) (0.2) さとうきび畑の歌。明石家さんまがでよるやつ＝

05 学生：＝ですよね。明石家さんまがでてるやつですよね。(へ：)
【大見さん顔をあげて学生を見る】

06 大見：テレビ大阪では(.)女() (3.0) 8時54分から
注)〔〕内は原田。【】内は動作。

3-1. 潜在的完結点

大見さんは1行目において、学生の「何か (なんか)」という発言を受けると、その後に続く質問「ありましたか」を聞く前に雑誌を手にするという、質問の意図を予測したと考えられる行動を取っている。この質問の予測と、学生の発話を最後まで聞いたことによる質問内容の確認と理解により、結果として1行目と2行目は、問い-答えという隣接対(好井ら編 1999:16)による会話構成となっている。これは質問をしたその結果として、次の順番に「答え」がくるといった拘束力をもたせる可能性もでてくるためである(同書5頁)。この時に学生が、例えば、「何か」という疑問詞を順番の最初にもっていくことで、これから何らかの質問をつくり出す可能性を強く投企することができるが、実際の会話では文頭に用いられてはいない。疑問の投企により潜在的完結点に近いことを察知したのが、文頭に疑問詞が提示される場合に比べて、遅いために大見さんは、「何か」と聞くと同時に質問内容を予測して雑誌に目を向けるという行動を取っていると考えられる。発話を最後まで聞くことなく、「今日のおもしろい番組」を探す、もしくは思い出すことを、急いで行おうとする様子は雑誌に目をやり、手に取るまでの動作の流れが速いことからもうかがえる。ここで私は、大見さんが常に雑誌とテレビのリモコンをベッドに手に届く範囲に置いていることや、手に取る一連の動作の流れがスムーズであることから頻繁に雑誌を見ているという習慣があると推測する。こうした習慣と質問に答えなくてはならないという気持ちから、大見さんは急いで雑誌を手にとったのではないかと考える。

3-2. 雑誌の役割—自己訂正と他者訂正—

ここで雑誌は、単に“今日のおもしろい番組”を探すためのものではないと考えられる。2行目において大見さんは、雑誌を開く前に「さとうきびの」と答えている。質問の途中で雑誌を手にとったことにより、質問を予測し理解したことを非言語的に表明する役割と対

応する手段としての役割を果たしている。この時、答えるまでにわずかだが時間がかかったにも関わらず、質問を理解しているが正確な情報から答えるまでの会話の空白をうめる役割として雑誌が利用されている。私たちがインタビューを行う際に、「メモ取りはメモを取るという目的の他に、次の質問を考えるまでの時間つなぎになる」と学んだことから推測できるのではないかと思う。学生が 3 行目で「あー」と言ったことで、大見さんの応答に対するコメントとなっている。ここでの「あー」は、「①軽く呼びかける語。②親しい間柄で、同意や肯定の意を表す語。」「物事を感じて発する語。ah:oh」（『日本語大辞典』、1989:1）「①ものを感じて発する声。②呼びかける声。③応答の声。」（『広辞苑』第 5 版、1998）〔いずれも感動詞の「ああ」を引用した。〕という辞書に載っているような使われ方というよりは、状態動詞（Change of State Token：話者の知識状態が例えば「無知」から「知」に変わるように、変化があったことを表示する発話の形：英語の Oh に相当）として使われていると考えられるだろう。「a[aa]ああ int.[感動詞][感動の発声]Ah!;Oh!;O!;Alas!」（下線は原田）（『新和英大辞典』第 4 版、1974:1）に記載されているように「ああ」と同様の意味で使われる「Oh」には、通常辞書に掲載されている言葉の意味とは違う水準の意味を会話分析の意味が明らかにしうることを示したエスノメソドロジー研究がある。

2004 年 8 月 4 日 大見さんの部屋

さとうきび畑①断片（簡略化）

- 01 学生：今日おもしろい番組何か、ありましたか ← 質問
- 02 大見： (1.8) さとうきびの、ある (わ) ← 応答
- 03 学生：あ：：： ← Change of State Token：コメント
- 04 (0.2)
- 05 大見：9 時 [PM] から ((眼鏡を外す)) (0.2) さとうきび畑の歌、明石家さんまがで
よるやつ＝

学生が 3 行目で「あー」と言った後に、大見さんはページをめくりながら「9 時から」と補足することで 1 行目の学生の質問に十分に答えているが、記載されているページまでめくる手を休めることはない。この動作により、音声上の無音がトラブルでなくなり、沈黙が沈黙として会話の参与者に重くのしかかってくるのが回避されていると言えよう。そして記載ページにたどり着くと眼鏡を外し、「さとうきびの」という不完全であった 2 行目の記憶に基づいた答えを言い直している。

これは曖昧であった発言に自己継続したと考えられるが、この時、学生は 2 行目の不完全な答えに対してコメントの意味を含んだ「あー」と返答している。ここで、大見さんが雑誌をめくっていることの果たす役割として、タイトルを何となく覚えているが正確なことはあまりよく知らないことを表している可能性が相手に察知され、具体的な質問を重ねて行うのではなく、与えてくれた応答に対するコメントを行う方が無難であることを知らせているように思った。そのため、自己訂正を促すような発言がなかったのではないかと考える。では、なぜ他者訂正がされていないのか。理由として、正しいタイトルをその場にいた 3 人（大見さん、学生 2 人）が知らなかった。知ってはいるが、言わなかった。この 2 点があげられるだろう。前者の場合で他者訂正がされないのは、大見さんが正確なこ

とはあまりよく知らないことを示しているにも関わらず、自分も知らないことをあえて取り上げて訂正したり追及することは、会話の混乱を起こしかねない。ならば、知らないことを言うよりは、大見さんが雑誌を調べている行為から、正確なことが明らかになるのを待った方が場に適していると判断されることが起こりうるように思われる。後者でも、大見さんが雑誌で調べていることから、相手の尊厳をも揺るがしかねない他者訂正を行うよりも、自己継続を待つという行為に至らせたと考える。この背景には、前述の「自己訂正は他者訂正に優先される」ということがあげられる。

3行目で学生が「あー」と発言したものの、その後さらにコメントしていない。「あー」という発話が、学生が知っていることを表していたならば、大見さんの雑誌による新たな情報「明石家さんまがでよるやつ」という言葉によって、さらに、私も知っていることを表す5行目の「ですよ 明石家さんまがでてるやつですよ」という発言につながっていく。私も知っていることを表明したために、その言葉を確かなものとして相手に知らせるという意味もあり5行目の相づち(?)がされたのではないかと考えた。学生が「ですよ」と言うと、大見さんはそれまでは雑誌を見ていたが、パッと顔をあげている。

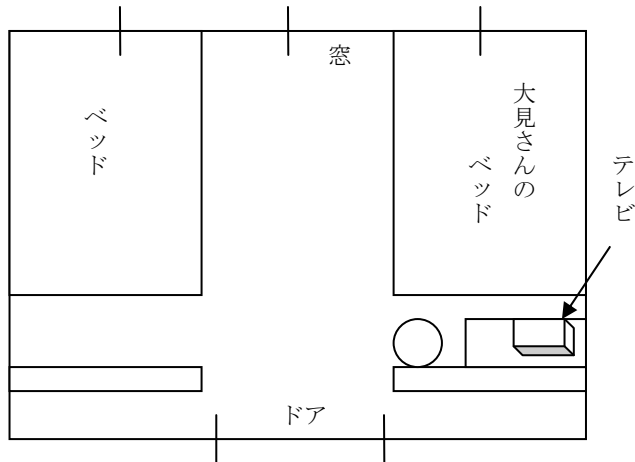
3-3. 雑誌の役割—副次的関与—

これまでに私は、雑誌をめくったりテレビを見ることは、「動作があることによって音声上の沈黙（無音）がトラブルでなくなる」という役割も果たしているのではないかと述べてきた。ここで雑誌の役割について E.ゴッフマンの著書を引用したい。

場面の中であるひとつの主要関与が指定されるかされないかは別として、社会的集まり—少なくともミドル・クラスの集まり—の中にいる者は、その集まりから全面的に遊離している自己の姿を見せまいとして、少なくともある最小限の主要関与を維持しようとする。これは、なぜわれわれの社会で待合室や旅客機に、雑誌や新聞などを会社側が備えているか、という理由のひとつである。これらの備え物は、最小限の関与に役だつにすぎないが、それが重宝がられるのは、(待つことだけしかすることのない時に) その重要さが増すということだけでなく、乗り換え駅や目的地でいつでもそれを手放すことができるからである。特に、新聞はここで重要な役割をはたしている。新聞は、携帯に便利なので、いつでも関与のよりどころとなっているし、また新聞は、関与すべきことがらに関与していないと感じた時には、いつでも取り出して読むことができる。(E.ゴッフマン 丸木ら訳 1980:56-57)

ここで、関与とは、ある個人がある行為—ひとりでする仕事、会話、協同の仕事など—をするのに調和のとれた注意をはらったり、あるいははらうのをさし控えたりする能力のことをいう(同書 48 頁)。大見さんは部屋にいる時はテレビを見ていることが多く、画面に向かって体を左に傾けるようにベッドに座っていたのだが、つねに手が届く範囲に雑誌とリモコンが置かれていた。(図 2、画像 1 参照) このため、引用文の新聞のようにいつでも取り出して読むことが可能であった。大見さんは行為の基本線からは遊離している副次的関与をとる他にも、かかわりを放棄するなどの手を使うことができたと考えられる。けれども現場放棄として退去を行うことは、あとにとり残された人に「かかわりの対象として

不適当な人物である」と感じさせるという問題を生じかねない。E.ゴッフマンが示すように退去とは、相手に対する拒絶を表明する物理的行為であるためである（同書 198 頁）。これらのことから、会話が途切れた時などに雑誌やテレビに目を向けるという行為は、場に対する配慮の意思表示であると考えられるのではないかと思う。



【図 2：部屋の配置図】



【画像 12：雑誌を見る大見さん（15:12:45）】

2004 年 8 月 4 日 軽作業所

さとうきび畑② 1:13:42PM~1:14:42PM

- 01 女性 1 : 今日大見つあって何のテレビ見る [ん (で)
 02 男性 1 : [ha ha ha ha
 03 大見 : 麦畑や言うん
 04 男性 2 : hah hah
 05 職員 : 麦畑? (.) 何ほれ? heh [heh
 06 男性 2 : [ほれ何? =
 07 大見 : =沖縄の.
 08 女性 2? : ふう : : [ん
 09 職員? : [ふ : : ん=
 10 男性 2 : =戦争?.
 11 大見 : 戦争の [麦畑って
 12 男性? : [ふ : : ん
 13 男性 2 : 大体いつく何チャンネルで?
 14 大見 : (さんばとび) <4. 4
 15 男性 2 : 4. 何時から?
 16 大見 : 9時から.
 17 男性 2 : あ : : . わし戦争の (話) 見るん好きや=
 18 女性 1 : =あのな [8月のな. 15日な. [終戦日
 19 女性? : [(へえ)
 20 男性 2? : [だっ
 21 職員 : . gh [終戦記念日な : =

- 22 大見 : [しゅ =終戦記念日
- 23 男性 : 終戦記念 [日]
- 24 女性 1 : [う : ん]
- 25 男性 : 終戦記念日=
- 26 職員 : =まあ終戦日. うん.
- 27 男性 2 : heh heh= =heh heh
- 28 職員 : =heh [heh=
- 29 女性 1 : [でも外国のな防火牢
- 30 職員 : そう (や) 原爆の歌歌わ.. 6 日と 9 日ちやうん=
- 31 男性 2 : =う : ん
- 32 女性 1 ? : そうやな
- 33 ? : もうい [い]
- 34 男性 2 : [hah hah 絶対やっちゃん嘘やな.
- 35 男性 ? : huh huh
- 36 男性 3 : なんちゃ心配することないやろ. [heh heh いつも通り=
- 37 職員 : [う : ん]
- 38 男性 2 : =誰か (.) きっかけがあつたらうるさいんで
- 39 男性 3 : ほ [うやな
- 40 職員 : [う : ん
チャイムの音 2 回 職員連絡の放送のアナウンス
- 41 男性 3 : . さっきは春うららやったところやしな (.)

3-4. 本当は知っている人がいた可能性について

さとうきび畑①で 7:55AM に大見さんが“今日のおもしろい”番組として提示したタイトル「さとうきび畑」が、1:13PM の会話では、「さとうきび畑」を「麦畑」と誤って話されている。注目部分で前述したように、私は他者訂正がされていない箇所であるテレビ番組の会話について、会話の参加者が「麦畑」が本当は「さとうきび畑」であることを知らないために他者訂正がなされなかったと考えた。だがここで、「“麦畑”が本当は“さとうきび畑”であることを知っている人がいた」可能性や、会話の中で、自己訂正を促す箇所が見られることはなかったか、本当は知っている人がいたのかどうかについて考えていきたい。

1 行目で女性 1 の大見さんに対する質問があると、笑いが起きている。笑いが起きるような発言でもないにも関わらず、だ。この笑いは、質問の受け手である大見さんに対して、ひとつ間違えば個人としての尊厳を蔑ろにした行為であると捉えられてもおかしくない。1 行目の質問が、受け手である大見さんに合わせた質問であると考えられることから、2 行目の笑いは、大見さんがテレビ好きであることを会話の参加者が知っていることを表しているように思われる。また、これまでも（頻繁に？）大見さんがこの質問を受けているようにもとれた。しかし、これは大見さんが中心である（調査対象者として注目を集めている）ことを作業所の人が知っていることを表している可能性があるのではないかと岡田光弘氏に指摘して頂いた。2 行目の男性の笑いが、意識して質問を行ったことに対する笑いで

あるならば、この笑いが大見さんを軽視しているものではないと考えられる。そして 3 行目で大見さんが答えるという流れになっている。だがこの大見さんの応答に対して、4 行目でも 2 行目と同様に笑いが起きるような発言ではないにも関わらず、笑いがおきている。質問—答え—コメントととり得るのだろうか。

5 行目で職員が「麦畑？何ほれ」と質問している。ここは、「本当は知っている人がいた」という可能性を持っている箇所ではないかと思う。

3-5. 他者訂正

2004 年 8 月 4 日 軽作業所

さとうきび畑②断片

- 18 女性 1 : =あのな [8 月のな. 15 日な. [終戦日
 19 女性 ? : [(へえ)
 20 男性 2 ? : [だっ
 21 職員 : . gh [終戦記念日な : = ← 割り込みではない
 22 大見 : [しゅ =終戦記念日
 23 男性 : 終戦記念 [日
 24 女性 1 : [う : ん
 25 男性 : 終戦記念日=
 26 職員 : =まあ終戦日. うん. ← 再修正
 27 男性 2 : heh heh= =heh heh
 28 職員 : =heh [heh=
 29 女性 1 : [でも外国のな防火牢 ← 体面確保
 30 職員 : そう (や) 原爆の歌歌わ.. 6 日と 9 日ちゃうん=
 31 男性 2 : =う : ん
 32 女性 1 ? : そうやな

21 行目と 22 行目の他者訂正はわずかな差ではあるが、職員が大見さんより早い。職員が訂正をした直後に大見さんも女性 1 に訂正を行っているが、その前にオーバーラップがおきており、この時、話を継続したのは職員であった。ここでオーバーラップの前に見られる職員の喉音「ん (gh)」や、若干早く声を出したことが最初の発話者としての優先権を得たと考える。そして、この「ん」によって職員の他者訂正は割り込みではなくなっており、しかも「終戦記念日な」と軽くとめる助詞を用いることで語尾を弱めている。このように訂正することで女性 1 の体面に配慮していると考えられる。しかし 21 行目の職員の訂正の後に大見さんと男性 2 人が続けて「終戦記念日」と、強く他者訂正をするかたちとなっている。女性 1 は 24 行目に相づちをうっているが、その後も他者訂正は続く。24 行目の「うーん」という女性 1 の相づちは承認であったり反論であると考えられるが、29 行目で「でも外国のな防火牢」と答えて話を先にすすめている。このことから、女性 1 の話において重要なことは、焦点を日か記念日かではなく「終戦」に置いていることを「でも」で示すことによって、女性 1 が自らの体面を確保しているということである。そして女性 1 が強く他者訂正されたことで、初めに訂正をした職員が 26 行目では「まあ終戦日. うん.」と

再修正を行っていることが分かる。つまり、この職員による再修正は、相手の尊厳をも揺るがしかねない他者訂正における配慮が示された発話であると考えられる

また職員の後に続けられる他者訂正は、それまでの戦争についての会話と関連性を持った発言であり「8月15日は戦争が終結した日」であるということを知っている女性1の立場を揺るがすものであった。21行目において、「知っている者」というメンバーシップカテゴリーを確立した職員は、「終戦記念日」であることは知らないが「8月15日は戦争が終結した日」であるという点では同じ「知っている者」である女性1の立場の修復として26行目の発話を行っているように思う。またこの会話から「会話のシークエンス（流れ）における次の一手は偶発性によるが、一定の規範的な制約がされている（山崎編 2004:38）」ことが分かる。そして職員は、30行目においても「知っている者」として振る舞っている。（好井ら編 1999:124-147 参照）

4. まとめ

大見さんにとって雑誌は情報を得るためだけに手に取るのではなく、質問を察知したことを表したりページをめくることで音声上の無音（沈黙）をトラブルとしないという、文脈に応じた使われ方がされていた。雑誌は、会話という主要関与がなされている際に、会話と並行してさり気なく続けられている行為である副次的関与としての使われ方がされていたと考える。こうした使われ方は、私たちの日常でもみられるものであり状況によって選択され得るものであるといえるだろう。また状況に依存した言葉の使われ方として、配慮であったり、体面確保をはかるために辞書には書かれていない使われ方がされていた。補論の正島の「杖という道具の扱われ方」でも、杖が体を支えるというマニュアルに書かれている使われ方だけではなく、窓を開けるように、いかに生活を便利に過ごしやすくするかという意識の中で道具や言葉も文脈に依存しながら使われているのだろう。

最後に、遠方からお越し頂き、適切なアドバイスをしてくださった岡田光弘さんのご意見は大変参考になりました。ありがとうございました。

参考文献

- E.ゴッフマン著 丸木恵祐、本名信行訳、1980 『ゴッフマンの社会学 4 集まりの構造』 誠信書房
- 山崎敬一編。2004 『実践エスノメソドロジー入門』 有斐閣
- 好井裕明、山田富秋、西坂仰編、1999 『会話分析への招待』 世界思想社
- 梅棹忠夫、金田一春彦、坂東篤義、日野原重明監修、1989 『日本語大辞典』、講談社
- 新村出編、第一版 1955、第5版 1998 『広辞苑』第5版、岩波書店
- 増田綱主幹、羽柴正市監修、市川繁治郎、日南田一男編集協力、1918、『新和英大辞典』（初版）、研究社、1974（第4版）
- MORRIS G.H. and CHENAIL RONALD J. (ads.)、1995 『THE TALK OF THE CLINIC』 LAWRENCE ERLBAUM ASSOCIATES,PUBLISHERS Hillsdale,New Jersey
(原田越代)

補論：杖という道具の扱われ方

掃除は各担当が決まっているが、今回ビデオ撮影した日（2004年8月4日）に関していうと、大見さんは大見さん自身の部屋を掃除していた。部屋は二人部屋になっていて、入って右側が大見さんのスペースである。掃除は主に右側を中心に行っていた。ですぐの廊下に掃除機があり、それを使う。時間は5分程度の簡単なもの。掃除の基本的やり方は、右手に掃除機を持ち動かしながら、左手に杖を持って体を支えるというものである。しかし、細かく分析してみると杖や、杖以外のものをうまく利用して大見さんなりに掃除を行っていることが分かった。

<体を支える>

掃除機を持って体を動かすということは健常者にとっては簡単なことだが、大見さんの場合は簡単に行える動作ではない。掃除機のホースを持つことで非常に体のバランスが悪くなり、不安定な体勢になってしまう。そのため杖が体を支えるのに使われなければならないが、掃除機を使うことで、その杖が体を支える役割を果たせない瞬間がある。そういう瞬間を含んでいる掃除の場面では、体を支えることが非常に大切になる。ここで大見さんは3つのもので体を支えながら、上手に掃除をしていることが分かる。

1. 杖で体を支える

普段は右手に杖を持って歩いているが、掃除の時や、座るために椅子を引いたりなど手の動作を必要とするときは比較的自由に動かせる右手を使うために左手に杖を持つ。右手の掃除機ホースを動かしながら、自分の周辺の掃除を行う。



【画像1：杖で体を支える（7:53:05AM）】

2. ベッドのパイプで支える

体の方向を変えるときにはやはり体の支えが必要となる。ここではベッドのパイプを支えにし、うまく体の向きを変えている。



【画像2：ベッドのパイプで支える（7:51:30AM）】

3. 掃除機で支える

普通は体を支えるべき杖がここでは上手く機能していない。しかも、掃除機のホースまで左手で持っているため、ますます不安定な体勢をとらざるを得ない。そこで大見さんは不安定になった瞬間に素早く右手を掃除機本体の上につき体を支えている。



【画像3：掃除機で支える（7:53:38AM）】

4. 何も支えていない

道具を使って体を支えるというのは当てはまらないが、杖も何も使わずに足だけで支えている場面もあった。この場面はのちにも説明するが、大見さんの真正面にある窓を、杖を使って開けているところの足の部分の画像である。何も支えなしに立つことは少ないが、ここでは足を広げうまくバランスを保っていた。



【画像4：何も支えていない（7:52:46AM）】

杖は体を支える道具として、機能していると考えがちであるが、杖があってもその機能がうまく果たされていない場合があることがある。その場合には体を支えるという機能を、一般には体を支えるという機能を求められてはいない別のものにより補いながら掃除を行っているといえるのではないかな。

<道具の目的外使用>

前で示したように、掃除機で体を支えるということも、本来はそういう目的で作られていないものであり「道具の目的外使用」ともいえることである。ここでは、体を支えるために作られた杖の目的外使用の場面をとりあげる。

大見さんは掃除をする際に、窓を手ではなく杖でうまく窓を開けることをしていた。そのときには足だけで体を支えており、バランスよく保っていた。なれた感じでしめる時も杖を使い、窓をしめていた。



【画像 5 : 杖で窓を開ける (7:52:18AM)】

掃除の場面では杖以外にも掃除機、パイプの 3 つを体を支える道具として使っていることがわかったが、ただ単に杖以外のものが体を支える道具として自然に使うことができるのには、私は部屋の広さとも関係しているのではないかと考えた。大見さんの部屋は二人部屋で広さは十分とはいえない。しかしこの部屋が狭いことが逆に掃除機が体を支える道具としてうまく機能している要因になっているのだと思う。狭い部屋ではほとんど掃除機本体部分が遠くに動くことはない。3つ目の画像を見ればわかるが、掃除機の本体がちょうどあの位置にあるからこそ大見さんは動くことなしにすばやく手をつくことができ、体勢を保つことができる。また掃除機の大きさを考えてみると、部屋が狭いことから考えるとあの大きさの掃除機は逆にデメリットになるように思えるが、大見さんが手をつくことから考えればメリットになる。この位置と大きさは道具を使う点で重要な要素となるのではないかと思った。

(正島祐子)